

「子ども防災博士意見発表の部」

最優秀賞

「自分の命は自分で守る」

根来小学校 朝木 千愛さん



表彰式での発表風景

「自分の命は自分で守る」

この聞き慣れた言葉の本当の意味を、私達はどれほど分かっているでしょうか。地震の国と言われている日本。その中でも私達の住んでいるこの和歌山県は、三十年以内の発生確率が70パーセントといわれている「南海トラフ大地震」の被害を大きく受けてしまう所です。この避けようのない大災害について、私達ができること、しなければいけないことを今一度、「自分の命は自分で守る」という観点から考えてみようと思います。

私は先日、家族で防災について話し合う機会がありました。そしてその時、父と母からこう言われたのです。

「パパとママのことは気にしないで、自分の身を守り自分を助けること。パパとママも必ず自分のことは自分で守るから。」

私は胸がズキンとなりました。私の父は消防士、母は病院に勤めている助産師です。災害が起こっても、私は、父と母にすぐ会うことができないのです。二人ともそうした事態を考え、私に言ってくれたのでしょうか。しかし、頭では理解できても心の中ではやはり、「会えないのはいやだ」という気持ちがぐるぐると回らずにはいられませんでした。事実、父の話によると、東日本大震災で救助に行った人は、家族となかなか会えなかったそうです。連絡すらもとれない状況も決して少なくありませんでした。この時の私は、それを完全に受け入れられることができなかつたのかもしれない。

みなさんは「釜石の奇跡」を知っていますか。東日本大震災が発生した時、小中学生自身の判断で避難し、大勢の命が助かったという事例です。津波避難三原則の教えが徹底されていたから、ということももちろんですが、もうひとつ、大きな要因があったからということも言われています。それは、

「子は大丈夫、自分の命は自分で守る。」

ということです。そうです。私の父と母が言っていた、あの言葉だったのです。親が子を心配することは当然です。ですが、まず自らの命を守る「自助」の精神を持って行動したからこそその「奇跡」だったのではないのでしょうか。

もうひとつ、みなさんに考えてもらいたい言葉があります。それは、「ハザードマップをたよってはいけない。」

というものです。ハザードマップとは想定される被害、浸水場所、避難経路などがかけられた災害の時にそなえた物です。それをたよるなということはどういうことなのでしょう。答えは、現実起こった事実から見えてきました。東日本大震災では、ハザードマップに示されていない所まで津波が到達したのです。身を守るためのツールは、あくまでも参考にすぎないのです。「想定にとられるな。」という原則はやはり大切なものだとすることを、私は再確認しました。

私たちは、地震というものから逃れることはできません。しかし、学ぶことはできます。学んだことを活かし、実現していくことこそ、「自分の命を守る」ということだと思ふのです。一人でも多くの人の命が助かるためにもこれまでの災害から、本当の意味で学び、伝え、実行していかなければなりません。そして、それは、これから生きる私たちにしかできないことだと思ひます。

最後に、私は、父が消防士で良かったと思っています。はなれてしまったりなかなか会えないのは悲しいけれど、私達のために一生けん命、働き、人を助けてくれています。

「自分の身を守り、自分を助けること。」

守ってくれている父からの言葉を私自身がまずしっかりと心にとめていこうと思ひます。

